

株式会社日精ピーアール(中村慎一郎社長、東京都千代田区)は、東日本大震災の被災者に対して、自社らしい支援の仕方と考えた結果、複製画を避難所へ寄贈することで大変喜ばれた。義援金や生活物資を送り届けることも大事だが、印刷会社ならではの心のケアに目を向けた取組みが人々を救っている。

被災者の心に"潤い"

日精ピーアール 複製画を避難所に寄贈



贈呈された絵がお年寄りの心を癒した(二本松市「みどりの郷」で)

卓越した高精細印刷技術を持つ同社は、現代印象画の巨匠と称されるスペインの画家トレンツ・リヤドの作品を選び、これを複製印刷し額装したうえで、現地へ赴いて展示作業を行

った。支援活動は、趣旨に賛同した東邦銀行(本店・福島市)の協力を得て実現した。全社員に対して義援金の募集も行った。額装するための額の

購入に充て、当初予定していたよりも多くの絵を贈呈できた経緯がある。これにより、全社員参加の支援活動という一体感が生まれた。最初に展示を行ったのは、郡山市にあるビッグパレットふくしま。二人の社員がガソリンの給油を繰り返しながら車で絵を運び、4月25日に24点の作品を展示した。訪問時には、福島第一原発から10キロ内にある富岡町、隣接する川内村から避難していた1500名が居住していた。震災で大きな傷を負った被災者の心に、リヤドが描いた薔薇の豊かな色彩が沁み入る。避難所には安らぎと明るさをもたらされた。避難生活をしてきた人々は順に仮設住宅に移り住んだが、希望する人には管理担当者の裁量によって絵が手渡された。その後、「殺風景な部屋が明るくなる」など感謝の言葉が担当者に寄せられたという。2回目は、福島県二本松市の特別養護老人ホーム「みどりの郷」に対して実施。ここには南相馬町のお年寄り約70名が身を寄せていた。6月3日に20点の作品を持参し、入居者が毎日通る通路の両壁や運動エリアなどに展示した。施設長の希望で行われた贈呈式では、車椅子の高齢者の方が絵をしっかりと持って何度もうなずき、感謝の気持ちを表した。中村社長をはじめ日も取り上げられている。

また、同社の今回の取組みは、東レ・印写システム販売部が9月に発行した水なし印刷情報誌『ピージー』にも取り上げられている。